

## 平成 30 年度 研究助成事業報告

令和元年 9 月 30 日まで助成。

氏名	学年	申請種別	講座名	指導教員	研究課題
ふわさおり 不破早央里	D2	研究集会の参加費への補助	心理臨床学	田中康裕	箱庭療法作品の分類の試み
いしい かよう 石井 佳葉	D3	研究費の補助	臨床実践指導学	高橋靖恵	ロールシャッハ法におけるイメージカード選択の現状に関する質問紙調査
いわい ゆか 岩井 有香	D3	研究費の補助	心理臨床学	桑原知子	中学校の“別室”における現状と教職員と心理職の協働について
ほう えいせい 彭 永成	M2	研究費の補助	教育社会学	佐藤卓己	ネット時代の結婚情報誌『ゼクシィ』からみる“消費する花嫁”
たけだ もえ 武田 萌	M2	研究費の補助	教育学	広瀬悠三	ヒューム『人間本性論』における「共感」－人間形成論における「共感」概念の可能性

### 平成 30 年度研究助成事業助成対象者コメント

#### —助成を受けて—

#### ■不破 早央里

この度は平成 30 年度京友会研究助成に採択を頂き、誠にありがとうございます。

本研究は、スイスの心理療法家 Kalf, D. M. が発展させたユング心理学を用いた心理療法である箱庭療法に関する研究です。日本には 1965 年に河合隼雄によって導入され、多くの症例・改善例がある一方で、その治療機序や治癒の要因に関する実証的研究は少なく、未だ明らかになっていない点が多くあります。その中で、箱庭作品そのものを分類するような客観的指標を開発する先行研究が海外では行われていますが、わが国ではほとんど開発されていません。客観的指標を作成することによって、箱庭そのものの理解が促進されたり、特有の展開が明らかになったりといった箱庭療法に示唆を与える知見が得られると考えます。そのため、今回の研究では、すでに刊行された箱庭療法を用いた事例論文をもとに箱庭療法の特徴や展開を掴むための客観的指標に基づいたカテゴリーを作成しました。今回得られたカテゴリーをさらに発展させ、そのカテゴリーを用いた箱庭作品の分析を通してさらなる知見を得ていく予定です。

今回いただいた助成金は、妥当性を高めるための協力者への謝金、資料の購入、研究成果の学会発表の参加費等に当てさせていただきます。本研究の成果が箱庭療法のさらなる発展、ひいては心理療法の発展そして心理療法を受けに来られる方々の理解の促進と治癒に繋がるよう、日々励んでまいります。

## ■石井 佳葉

この度は平成 30 年度京友会研究助成事業に採択していただき、心より感謝申し上げます。私は、病院や相談機関など心理の臨床現場において使用される心理検査の一つであるロールシャッハ法について研究を行っています。これは 1921 年に H.ロールシャッハという精神科医によって考案された検査であり、インクの染みを垂らしてできた刺激図版に対する被検者の反応から、心の状態や刺激に対応するための自我機能を理解することができると考えられています。約 100 年の経過の中で、様々な精神障害と関連させた研究が積み上げられてきましたが、1945 年以降にこの図版を用いて、対象者の父親・母親イメージを探る試みが生まれました。具体的には、被検者にロールシャッハ図版を呈示し、その中から父親・母親イメージを選択してもらう手続きです。しかし、この教示方法や解釈方法についてはいまだに標準化されていないという問題を抱えており、発展途上の領域であると言えます。そこで、私は、臨床心理士を対象にこの手続きの実施方法や解釈方法に関する質問紙を配布し、その実態を把握することを目的とした研究が必要であると考えました。

いただいた助成金は、調査等の対象者への謝金や、関連資料・文献の購入、郵便費の一部に充てさせていただきます。本研究の成果が、今後の心理検査の発展、ひいては臨床現場における対象者の心の状態のアセスメントに還元されるよう、邁進していく所存です。

## ■岩井 有香

この度は、私ども学校臨床研究会の研究に京友会研究助成事業助成金を頂きまして、誠に有難うございます。

私ども学校臨床研究会は、学校現場でスクールカウンセラーや心理サポーターとして臨床活動をしながら、現場で感じた疑問や課題について研究を続けております。現場の先生方や心理職、ひいては児童・生徒達の役に立つ研究となることを目指してテーマを決めて取り組み、関連学会での発表や論文投稿をおこなってきました。今年度は、中学校において、教室に入りづらい生徒が登校できるように設置されている「別室」の現状と、そこに関わる教職員や心理職の捉え方や関わり方を調査、検討し、学校における多職種により良い協働につながることを目的とした研究に取り組んでおります。頂きました助成金は、心理臨床学会にて発表、学会誌への論文投稿、また、調査研究に御協力頂いた方々へフィードバックを行う等、研究結果を現場に還元していくために使わせて頂きたいと存じます。

このように研究活動を行えますのも、京友会の皆様のおかげと感謝しております。また、質問紙調査をする際は、京友会の先輩方からのご紹介で調査にご協力頂いた学校もたくさんあり、京友会のつながり、支えの力強さを改めて感じました。伝統ある京友会の一員として、研鑽して参りたいと存じます。

この度は、誠にありがとうございました。

## ■彭 永成

この度は平成 30 年度京友会助成事業に採択していただき、誠にありがとうございます。

私は結婚情報誌『ゼクシィ』に着目して、そこから見る結婚イメージの変遷について研究しております。リクルート社発行の結婚情報誌『ゼクシィ』は「みなし婚」、「事実婚」の著しい増加などの逆風にも負けず、日本の結婚情報誌市場で独占的なシェアを占め、「結婚が決まると、誰でも一度は手に取る」と言われまでになっています。出版業界全体が低迷に陥った今や、ネットと連動して販売部数を伸ばしていく『ゼクシィ』は雑誌の未来に希望をつなぐ存在としても注目されています。ここでは、好調な売れ行きを見せた結婚情報誌『ゼクシィ』誌上における結婚のイメージはどのように変遷したかを本研究の問題意識とします。

しかしながら、日本では結婚情報誌に関する先行研究はほとんどないです。結婚イメージに関わる多くの研究では、「未婚者」の「結婚観」と「既婚者」の「家庭状態」に集中しており、「結婚」あるいは「結婚式」という結節点に対してほとんど注意が払われませんでした。また、雑誌研究、特に女性誌研究の領域では、「未婚女性」や「既婚女性」を読者とする研究は多い一方、結婚雑誌を素材とする研究はほぼ存在しないです。

上記の問題点を乗り越え、及び先行研究の空白を埋めるため、本研究は結婚情報誌『ゼクシィ』を研究対象とし、量的及び質的分析を行います。誌上で絵描かれている結婚イメージを注目することによって、『ゼクシィ』ではどのような結婚イメージを描き、それはどのような結婚文化を反映していたのかを解明できると考えられます。

修士論文では上記の問題意識に従い、『ゼクシィ』に見る結婚イメージの変遷について論じます。今回頂いた助成につきましては、資料収集ための旅費、雑誌『ゼクシィ』及び関連文献の購入と複写に使用しました。

## ■武田 萌

この度は平成 30 年度京友会助成事業に採択いただき、誠にありがとうございます。

私の研究関心は「共感」という概念にあり、18 世紀スコットランドの思想家デイヴィッド・ヒューム (David Hume, 1711-1776) が、主著『人間本性論』において示した「共感 sympathy」概念に関する研究を行っています。

ヒュームはその体系内の知性論の内容から、当時のイギリス経験論を袋小路に導いてしまった懐疑主義者であるとして、哲学史の中でたびたび批判の対象にあげられてきました。しかしその一方で彼は、懐疑に沈み続けるのではなく、むしろ人間が情念をもち他者と交渉するという側面に着目し、道徳論をはじめ政治・経済の分野にも多数の著作を遺した思想家でもあります。

ヒュームはその思想体系の中で、「共感」という原理を採り入れ、それを情念のみならず道徳や知性を論じたその体系全体にも深く関わるものとして位置づけました。したがってヒュームにおける「共感」概念は、自己の同一性を論じている知性論と不可分の関係にあります。このことが、人間が自己の内側のみで完結せずに外部と関わって変容しうる存在であることと深く関わっている、と私は考えています。本研究では、ヒュームにおける「共感」という自己のあり方が、人間の变容や人間形成の側面においていかなる可能性をもつか、という観点から『人間本性論』の文献研究を中心に進めてまいります。

いただいた研究助成金は、主にヒュームの書籍と先行研究の収集のため、そして学会参加に関する費用の一部に充てさせていただきます。

## 研究助成報告

### 不破 佐央里

平成 30 年度京友会助成金をいただきまして誠にありがとうございました。今回助成をいただいた研究では、スイスのユング心理学分析家 Kalff によって考案され、日本で心理臨床領域だけでなく、教育・福祉領域など幅広い領域で用いられている心理療法である箱庭療法の中で、人はどのようにして治癒に向かうのかというプロセスを明らかにしていこうとする研究です。これまで実際に行われた箱庭療法の事例を収集し、分析していく第一段階として、箱庭作品から分析するための指標を作成する研究を行いました。作成された指標は従来の理論からも支持され、

性差や呈する症状などの間に差異が見られました。本研究で得られた結果は今後、より多くの研究に用いることが出来ると考えられ、さらなる箱庭療法の知見を得られると考えています。

今回の研究結果は、2018年10月21日に新潟青陵大学で開催された日本箱庭療法学会第32回大会において発表いたしました。発表では多くのご意見をいただき、本研究の意義を再確認すると同時に、研究デザインや結果に対するご指摘を受けて本研究の課題を確認することができました。本研究の課題を再検討し、指標の改訂等の修正を行い、さらに適用する事例を、日本で刊行された事例を網羅する範囲に広げた研究結果を2019年9月6日ドイツベルリンにて行われた国際箱庭療法学会第25回大会で“A Meta-Analysis of Japanese Clinical Cases of Sandplay Therapy: An Exploratory Study of Establishing Assessment Tool of Sand Trays”として発表しました。今後は日本国内で本結果について学会発表を行った後に論文として投稿を予定しております。本研究結果が心理臨床学に対する大きな示唆を得られるものであると考えております。

助成金は、日本箱庭療法学会第32回大会が開催された新潟への旅費の一部、妥当性を高めるための外部コーディネーター協力者への謝金や資料収集のために使わせていただきました。ご支援いただきましたこと、深く感謝いたします。助成期間は終了いたしました。さらなる研究を進めることや研究結果を広く発表していくことに邁進していきたいと考えております。誠にありがとうございました。

## 石井 佳葉

心理検査の一つであるロールシャッハ法は、1921年にH.Rorschachによって発表されて以来、現代に至るまで各国の臨床現場において用いられてきました。私が着目している「イメージカード選択」という手続きは、臨床実践の中で徐々に導入されるようになりました。具体的には、10枚のロールシャッハ図版の中から、好き、嫌い、父親、母親、自分など指定されたイメージに合うカードを選択した後、その理由について説明してもらいます。そして、そこで得られた反応をもとに心理的アセスメントに役立てることを目的として用いられます。ロールシャッハ法を通して様々な精神症状や精神障害の特徴を把握しようとする研究は多く積み上げられてきましたが、イメージカード選択に焦点を当てた研究は数えるほどしかありません。そのため、この手続きによって、被検者のどのような側面を理解することが可能なのか、心理的アセスメントにどの程度寄与し得るのかについてはほとんど示されていないと言えます。

そこで、本研究では本邦におけるイメージカード選択の実施状況および学習機会を把握することを目的として、ロールシャッハ法を施行している臨床心理士を対象に質問紙調査を行いました。その結果、調査協力者の90%以上がこの手続きを認知しているにもかかわらず、施行者によって教示や解釈の方法が異なることが示されました。この背景として、イメージカード選択については、専門学会主催の研修会や大学院においてほとんど扱われていないなど、学習機会の不十分さが推察されました。そのため、イメージカード選択は各臨床現場で用いられる中で独自に発展してきた可能性が窺われ、心理的アセスメントとしての位置づけが曖昧になっていることが示唆されました。なお、この調査をもとに執筆した論文は京都大学大学院教育学研究科紀要第65号に掲載されています。

頂いた助成金は、調査対象者・機関への謝礼と郵送費、関連資料・文献の購入、調査に関する学会参加費・交通費の一部に充てさせていただきました。この助成事業のおかげで、今後の研究課題の第一歩を踏み出すことができました。心より感謝申し上げます。

## 岩井 有香

平成 30 年度京友会助成金を頂きまして有難うございました。私ども学校臨床研究会は、臨床心理学の視点から児童生徒の心の理解や教師と心理職の協働について研究しております。平成 30 年度は、不登校対策の 1 つである中学校の「別室」（不登校傾向の生徒が活動する教室以外の校内の場所）に着目し、その現状と教師や心理職の捉え方や関わり方について調査研究を実施しました。現在、「別室」に関する法規はなく、各学校、地方自治体がそれぞれの実態に合わせて試行錯誤で行っています。そのため、調査協力校を探すことは容易ではありませんでしたが、OB・OG の方とのつながりや助成金を頂いたことにより、広範囲の地域の学校に協力を依頼することが出来ました。

調査の結果から、「別室」には 4 つの構造が見られましたが、利用する生徒、関わる職員、行われる活動は様々でした。教師と心理職共に、『生徒が安心して人とつながる機会を持ち、学習やコミュニケーションのスキルを身に着けることを通して教室復帰を目指して欲しい。』という思いを持っているようでした。しかし、「別室」での活動や関わり方が自由で多様であるが故に、専門職としての関わりが曖昧になり、自らの専門性を超えて活動する場面が生じ、そのことが迷いや葛藤となっていることが窺われました。そして、それぞれの専門職が互いの専門性や葛藤を理解して「別室」に関わっていくことによって、従来の専門職同士の連携、協働ともアウトリーチとも異なる新しい連携、協働が生まれる可能性が示唆されました。

研究結果は、日本心理臨床学会第 38 回大会において口頭で発表いたしました。多くのご意見を頂き、学校臨床に関わる方々に役立つ提起が出来たと感じました。また、助成金を使い、研究結果のフィードバック資料を作成し、協力頂いた学校に送付することも出来ました。

助成期間は終了いたしました。この結果を論文として学会誌に投稿し、より多くの学校臨床に携わる専門職の方々の日々の活動に寄与するよう努力して参りたいと思います。

## 彭 永成

本研究は今日の日本において、最も売れているブライダル情報誌『ゼクシィ』を対象とし、そこで構築される結婚イメージについて検討しました。

晩婚化・未婚化問題が深刻化していく中、結婚をビジネスとする『ゼクシィ』はどのように今日の「一人勝ち」の場面に至りましたのか。また、これらの「結婚問題」を直面している結婚情報誌の中では、どのような結婚イメージが描かれていたのか。この二つの疑問を出発点として、雑誌の変化に伴い、結婚のイメージの変遷とその原因を明らかにすることが本研究の目的とします。

歴史分析と質的分析の手法を用いる本研究によって、以下のことが分かりました。

『ゼクシィ』は創刊初期の頃、販売部数が予想より下回るなど苦戦を強いられたこともありましたが、その後は個人購読への依存から企業広告に収入源を見出す形へビジネスモデルを転換しました。2000 年代に入ってから、様々の新事業への試みや、新たな結婚文化への対応を重ねて、今日の「結婚するならゼクシィ」と称される地位にまで成長しました。それに伴い、『ゼクシィ』が人々の結婚式の準備段階で果たす役割も「礼儀教本」から「アイデア集」へと変わりました。雑誌ブランドの知名度が拡大していくと共に、『ゼクシィ』はブライダル産業の新規市場開拓に貢献し、日本の結婚文化並びに結婚式文化の変容にも大きな影響を及ぼしました。

誌上で描かれた結婚イメージは 21 世紀に入って、花嫁が「ステキな奥さん」から「完璧なヒロイン」へ変身を遂げ、花婿が「主人公」から「脇役」へ降格され、「監督」役だった両親が権力を失い、結果的に結婚式の特別出演としての役割に甘んじるようになりました。それ以外、『ゼクシィ』が構築する結婚イメージの特徴としては、結婚や結婚式における男女地位の逆転や、結婚式をめぐる関係者内部の合意形成におけるゲートキーパー、あるいは

はオピニオンリーダーとしての花嫁という表象が見られました。

助成金につきましては、主に『ゼクシィ』の雑誌購入とコピー、資料収集ための旅費及び関連文献の購入に使わせていただきました。博士課程に進学する後にもこのテーマについてさらに研究を進み、出来るだけ早く成果を公表すると考えております。研究助成をいただきましたこと、深くお礼申し上げます。

## 武田 萌

本研究は、18世紀スコットランドの思想家デイヴィッド・ヒューム (David Hume) が、主著『人間本性論』において示した「共感 sympathy」概念に関するものです。本研究の目的は、ヒュームにおける「自己」のあり方の検討を行なうことを通して、「共感」が可能にした自己のあり方を示し、「共感」の射程に自己の問題が含まれると明らかにすることです。

「共感」という概念は、古代から現代に至るまで、哲学に限らず様々な分野において検討が試みられてきた概念です。そのような「共感」に関する概念史の調査とヒュームの「共感」概念に関する先行研究から、「共感」の指す内容が、それぞれの時代の思想における「自己」のあり方を反映して変遷していることが明らかになりました。

これをうけて、ヒュームにおける「自己」のあり方を、17-18世紀において重要視されていた人格の同一性に関する議論を参考にしながら調査しました。その結果、ヒュームは「自己」を位置付ける際に個々の記憶に重要な位置を与え、「自己」を変化しながら存在し続けることのできる一つの体系というモデルで示していたことが明らかになりました。

そしてこの体系において、同一性を失わせる働きと同一性を作り出す働きとの両方を担っているヒュームの「共感」は、変化しつつも固有性を保ちうるしなやかな「自己」という体系のあり方に深く関わっている、という結論が導かれました。以上の「共感」に関する理解は、環境や他者との関わり合いによって自己が変容する、という現象を「共感」概念の射程に収め、それによって広く人間形成に関わる領域に関する考察に寄与すると思われま

す。上述の研究の途中までの成果を、2018年10月に行われた教育哲学会で発表させていただきました。そして、発表の場でいただいたレスポンスに助けられながら、「共感」と「自己」のあり方の検討に関する修士論文を執筆いたしました。頂いた研究助成金は、主に教育哲学会への参加に関する費用、そしてヒュームの著作とこの研究に関する資料の収集のために充てさせていただきました。このような貴重なご支援をいただき、本当にありがとうございます。